

親鸞における普賢の徳の思想基盤について

道 元 徹 心

親鸞における普賢の徳の思想については、還相回向としての思想において語られることはあったが、「普賢の徳」そのものに絞って思想背景を論じられることがあまりなかったようである。

まず親鸞の著作の中でその用法を調べると、『教行信証』行巻大行釈の結嘆で「遵^ニ普賢之徳^ニ也^一」とある。また『浄土文類聚鈔』や『唯信鈔文意』においても普賢の徳が語られる。また、和讃において『浄土和讃』『高僧和讃』（曇鸞讃）と同様に表現され、その「普賢の徳」に弥陀の慈悲の極まりであるという意味で、詳しい左訓が記されている。この他に『浄土三経往生文類』や『如来二種廻向文』で、第二十二願文が大慈大悲の願として引用され、そこに普賢の徳なる表現がある。以上のように親鸞は還相回向を説く上で「普賢の徳」として表現していることが理解されよう。

ここで親鸞の普賢の徳の背景となる経論を調べておきたい。まず第二十二願文が『往生論註』巻下に二箇所にわたり

引用されるが、それを親鸞は『論註』の文として『教行信証』に引用する。また『無量寿如来会』の「行超^ニ普賢^ニ登^ニ彼岸^ニ」という文も『教行信証』に引用する。この他に引用はしないものの、親鸞が重視して扱ったと思われる経論の中で普賢の徳が表現されるものを調べると、「論註」に「齊^ニ普賢^ニ而同^ニ徳^ニ」とあり、また『無量寿経』や異訳の『無量寿如来会』の序文、それに第二十二願文に普賢の徳が説かれている。このように親鸞は『無量寿経』や『往生論註』を依り所として普賢の徳を表現していることがわかる。

さて、問題は普賢の徳の意味するところである。それは一般に弥陀の慈悲を指して言うのであるが、その思想背景がどこにあるかという事である。そこで経典をいろいろ調べていく上で、『華嚴経』が詳しく普賢の行法や行願を説くことが明らかとなり、普賢の徳の思想背景が考察できうることになったわけである。しかし、私の見解を述べる前に私とは異説である普賢の徳を「行普賢」とする説があるので、これに検

討を加えておきたいと思う。

この普賢の徳を「行普賢」と解することは、赤沼氏・山田氏の説である。華嚴の『孔目章』によると行普賢とは『華嚴經』離世間品所説の十種普賢心と十種普賢願行法である。そこでその内容を調べると、十種普賢心の大慈心と大悲心とは衆生済度の慈悲心を説いているが、十種普賢願行法を合わせて全体的な意味を考察しても、一般的な菩薩の智慧と慈悲の行と理解される。よって親鸞の普賢の徳の思想である弥陀の慈悲それに還相回向という従果向因の相としての思想に比べると、行普賢の所説はまだ不十分で普賢の徳の思想背景とするに適當でないと考えられる。

さて、私が注目したいのは『華嚴經』普賢行願品所説の普賢の十大願である。その内容を見ると、第一の礼敬諸仏と第二の称讃如来の願では如来を敬いその功德をたたえることを説く。第三の広修供養の願では仏の供養と共に衆生済度を説く。また第八の常随仏学で、

如此娑婆世界。毘盧遮那如来。從初發心。精進不退。以不可說不可說身命。而為布施。剝皮為紙。折骨為筆。……中略……如大雷震。隨其樂欲。成熱衆生。乃至示現入於涅槃。如是。一切我皆隨学。

として如来が種々な会座に変化して衆生を教化し仏果に向かわしめることが説かれる。これは還相回向の意味に相應して

いくものと思われる。また、第九の恒順衆生の願では、

菩薩如是平等饒益一切衆生。何以故。菩薩若能隨順衆生。則為隨順。供養諸仏。若於衆生。尊重承事。則為尊重承事。如来。若令衆生。生歡喜者。則令一切如来歡喜。何以故。諸仏如来。以大悲心。而為體故。因於衆生。而起大悲。因於大悲。生菩提心。因菩提心。成等正覺。譬如曠野沙磧之中。有大樹王。若根得水。……以下略

として、衆生を大樹の根に、仏果を花や果実、すい上げる水を大悲の水にそれぞれ譬えている。そして大悲の水によって衆生を饒益すると説き、また「是故菩提。属於衆生。若無衆生。一切菩薩。終不能成無上正覺。」と続いて説くのである。このように果によりて因に向かう（従果向因）説き方で、大悲による衆生済度を説いている。よってこの願の内容も普賢の徳の思想に呼応するものと考えられよう。そして、第十の普皆廻向の願は、第一から第九までの願の功德を一切衆生に回向して、悉く衆生を解脱せしめんとする願の内容で、還相回向との関連に強く関心が持たれるのである。そしてこれらの十大願を説き終わった後、

一刹那中。即得往生極樂世界。到已。即見阿彌陀仏。……中略……於一念中。所有行願。皆得成就。所獲福聚無量無邊。能於煩惱大苦海中。拔濟衆生。令其出離。皆得往生阿彌陀仏極樂世界。

と説く。十大願を受持することにおいて、衆生が阿弥陀仏の極楽世界に往生することを説いている。これは注目すべき説示であろう。普賢の大願が満足されて初めて普賢の徳と言えるのであり、親鸞の示した普賢の徳の意味がここに読み取れるものと理解されよう。

本論では親鸞における普賢の徳の思想基盤について考察し、『華嚴経』普賢行願品所説の普賢の十大願にその思想基盤を求めたのである。この点について従来の研究を調べると、行普賢として理解する説があったが、検討を加えた結果それは適当でないと考えられた。一方、私と同様な見解に達する研究が認められる。それは近年の研究では、幡谷氏が『無量寿経』序文の普賢大士の徳において求められる菩薩道について主として『華嚴経』の普賢行願品によって表わされた」と略述し、また先人の慧雲が『往生論註服宗記』で齊普賢等者。今生彼土者。生即無生。無生即生。恒順衆生普皆回向。二十二願成就。故云同徳一也。

と簡略に示し、道隱が『教行信証略讀』で普賢之徳者。於因果分不可説中。而現因門。從因果向因名普賢徳。勞謙善護齊普賢。而同徳者。

とごく簡略に指摘している。しかし、これら三人の指摘されるところは簡略な為その意味するところが理解し難く、この問題については今まで詳細な研究がなされてなかったと言っ

親鸞における普賢の徳の思想基盤について(道元)

てよいと思われる。上のように『華嚴経』の文に具体的な検討を加えて、普賢の十大願に思想基盤を求めることにより、これら先人達の指摘された意味もより明らかになってきたといえるのではないかと思われる。

- 1 真聖全二・三五。
 - 2 同、四四六。
 - 3 同、六二四。
 - 4 『親鸞聖人真蹟集成』第三卷・三三及び一八四。
 - 5 真聖全二・五五四及び七三一。
 - 6 同、三七及び一〇八。
 - 7 同、四九。
 - 8 真聖全一・二八六。
 - 9 山辺・赤沼著『教行信証講義』三九五頁。
 - 10 山田亮賢「親鸞における弥勒と普賢」、『真宗研究』十一・八四頁。
 - 11 大正四五・五八〇b・c。
 - 12 同、一〇・二八二a。
 - 13 同、一〇・八四四b。
 - 14 同、一〇・八四五c。
 - 15 同、一〇・八四六a。
 - 16 同、一〇・八四六c。
 - 17 幡谷明「大無量寿経の回向思想」、『親鸞教学』四〇・四一・二頁(二二頁)。
 - 18 真宗全書・第十卷三五頁。
 - 19 『教行信証講義集成』第七卷三七六頁。
- △キーワード▽ 普賢の徳、『華嚴経』、普賢の十大願
(龍谷大学大学院)